



恋瀬川付近における歩兵の戦闘訓練
(『写真記録茨城 20世紀』《茨城新聞社》より)

陸軍特別大演習と土浦中学生 2

茨城県で実施された陸軍の特別大演習は3回ありますが、今回は石岡地方を中心に行われた1929(昭和4)年の大演習を取り上げます。土浦中学生たちは地元の学校ということもあり、石岡付近での演習見学、土浦駅での奉送迎、水戸堀原練兵場での御親閲などで、生涯忘れ得ぬ感激に浸りました。昭和天皇の行幸日程に沿って、土浦中学生たちの動向とその思いを辿ってみます。文中の【 】内は筆者による注記です。

昭和天皇行幸日程

宮内大臣一木喜徳郎が枢密院議長倉富勇三郎に宛てた文書(宮発第653号)。

十一月十四日

午前十一時三十分 御發輦【はつれん

天皇の車が発する事】

同 十一時五十分 上野驛御發車

午後 二時 十分 水戸驛御着車

大本營 茨城縣廳

十一月十五日

演習御統裁

十一月十六日

演習御統裁

十一月十七日

演習御統裁

十一月十八日

午前 觀兵式

午後 賜饌【しせん 天皇が文武百官に食事を賜ること】

土浦駅での奉迎(11月14日)

陸軍の精銳を集めた南北両軍約4万の将兵は11月13日、陸軍特別大演習における各指定の位置に集結、14日正午鈴木庄六参謀総長から両軍司令官に一般方略が手交され、同夜8時から1929(昭和4)年の大演習が茨城県(15日石岡方面、16日水戸市外、17日常陸太田方面)で開始されました。

昭和天皇はこの大演習を統監するため、11月14日午前11時50分発のお召し列車【天皇、皇后、皇太后が使うために特別に運行される列車】で上野駅を出発されました。そのお召し列車の通過を土浦中学生たちは土浦駅でお迎えしましたが、その様子を3年生の中村好治(中31回)は「奉迎」と題して次のように記

しています。

「吾々民草【たみくさ 人民を草にたとえた語】は、聖天子の行幸【ぎょうこう 天皇の外出をいう。行先が2カ所以上にわたっているときは「巡幸」、帰りは「還幸」という】をお迎へするために、十一月十四日午後一時、土浦驛頭に整列しました。時は刻一刻と流れて行つた。吾々の心の奥深く鎮まる赤誠は、次第に動き始めて時の移動も感じられぬ程緊張した。御召列車の御通過の時間早や五分前に迫りし頃は、驛頭唯鎮まり返り、何とも言はれぬ感じが吾々の胸裏に往來し、切ない程の神々しさが身に迫るを覚え、終には心の在り所を知らない程に感じました。やがて御召列車は國旗をかざして靜々と御通過になられたのであります。申すも畏れ多い事ながら、天皇陛下には、民草の奉迎に對して一々御答禮を遊ばされました。

吾々はこのありがたき光景に、氣も失はんばかりに我を忘れこの光榮に浴したのであります。「『進修第31号』昭和5年3月1日発行) 土浦中学生をはじめ、土浦町民がお迎えたお召し列車は午後2時10分水戸駅に到着し、昭和天皇は大本營(行在所)である茨城県庁に入られました。

大演習見学(11月15日)

石岡方面で実施される大演習統監のため、午前10時10分に石岡駅に到着された昭和天皇は、お召し自動車にて、野外統監部に充てられた志筑五輪堂(権現山山頂東南端)の御野立所【おのだてしょ 大演習などに際し野外に設けられた天皇の休息所】に向かわれました。沿道には

3月の石岡大火(注)からの復興に取り組んでいた町民たちが、町の辻を始め、桑畑の中といわず、収穫前の田野といわず、ぎつしりと整列して感涙に咽びつつ奉迎を続けました。

土浦中学でもこの日、全生徒が大演習見学のため出掛けましたが、高倉付近にいた3年生の飯塚清一(中31回)は天皇一行の行列を

「十時頃だった。ぼんやり石岡の方を眺めてみると、道路から砂煙が昇つた。自動車だ。みんな一齊に視線をその方に向ける。天皇陛下の志筑村五輪堂の御野立所に行幸遊ばされる御輿【ろは 行幸・行啓のときの行列】であつた。暫く経つてもまだ自動車は盡きない。【陛下は上志筑からは乗馬にて御野立所に向かわれた】

やがて御野立所に陛下の御姿を拜した。誰かが旗だといふ。見ればそれは錦旗であつた。續いて黒く動く影が見える。續いて白い馬が二頭。その先の馬こそ陛下御召の御愛馬「吹雪」であらうと拜せられた。「『進修第31号・大演習見学』」と記しています。

昭和天皇は権現山の御野立所から大演習を統監されましたが、この大演習の様子を11月16日の朝日新聞はその見出しで次のように報道しています。

「常總の野 秋空晴れて

聖上大演習を御統監

御眼下に火ぶたを切られた

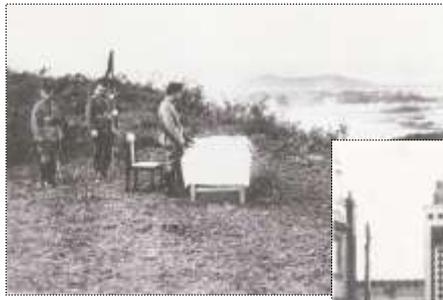
兩軍最初の遭遇戦」

「兩軍死力を盡して

石岡町に主力集中

空には飛行機猛闘を開始し

士氣揚る四萬の兵」



志筑村五輪堂で大演習統監の昭和天皇(上)、水戸駅から大本營に向かわれる天皇(右) (『大演習記念アルバム』《弘文社》より)

前出の3年生飯塚清一は演習の様子を同じく『進修第31号・大演習見學』で次のように述べています。

「しばらくして空には色の違った飛行機が入り亂れ戦闘を開始した。その後から審判機が飛んで行く。これが本當の戦なら今頃は白煙に包まれて落ちてくる機もあるだらうなどと考へてみると、そこから向ふの方でも、後の方でも機關銃の音、時々どんどんと殷々たる響、野砲の響らしい、盛んに轟き出した。しかし兵隊は何處に居るのかわからない。新聞には數萬の精兵が集中されるとか報ぜられてゐたから、あの戀瀬川を挟んで眞黒になる程現はれるだらうと思つてゐたが、そんな氣振りは更になかつた。

時に、彼處の森の下にゐた、あゝそこにも居つたといふやうに、ぼつりぼつりとしか見えなかつた。それでも機關銃だけは猛烈だつた。銃口からはづゝと火の出るのが遠くからよく見えた。

突然すぐその森の中から、ドツドツドツドツといふ素晴らしい機關銃の音、近くの山に鈺してその音の大きさ。我等は思はず耳に手を當てた。と同時に見物人はみんな音の方へ駆け出した。行くわ行くわ。もと居つた所は空っぽになつてしまつた。ドツドツドツドツ。そこでもこゝでも。

先頃まで退屈さうに腰かけてゐた人々も、目を丸くして立つて見てゐる。實戰ならば今頃は死人の山だ。そら歩兵が出て行つた。三人、五人、か、二三十人、こつちからも、みんな口々に叫んでゐる。

森の端から續々と出て来る、そしてどんどん前進する。戀瀬川の土堤を審判官らしい人が數人歩いてゐる。前進々々後から後から来る。どの兵隊も平氣な顔をしてゐる。誰かゞ言つてゐた。「敵は僚友撃つ彈空砲。」御野立所の側の山から時々煙火の様に上る煙がある。高射砲だらう。

兵隊が川の方へ前進する時に、その後から一團の見物人が駆け出した。高い所に陛下が御覽になつて居らせられるの考へないで。本當に罪のない人達だ。川の所迄行つて巡查に返された。

勇ましい戦が約二時間續いたと思はれる、丁度二時頃、休戦ラツパが、あたりの騒々しい銃聲、砲聲の中に、やはらかく、おごそかに響き渡つた。」

この大演習は、昭和天皇即位の礼後初

めての大演習であり、参加兵力は4万を超え、航空機、戦車、高射砲、照空灯、装甲自動車、その他の新兵器の運用を試みるという目的とともに、電信・鉄道・架橋・工兵、いわゆる現代科学の精粹を集めた初めての大演習でした。

演習を見學した3年生の根本義(中31回)は『進修第31号・大演習見學』で次のように述べて、第一次世界大戦に学び、來たるべき近代戦の性格をきちんと見据えています。

「そもそも特別大演習はこれを中心として軍隊地方官民舉つて天高肥馬の秋の野に興國的氣分に浸り演習地方一帯に互る興國運動となるのだ。

此の時又僕は考へた。近代戦は國家の全力を擧げて行はるゝ國民戰爭である。國防は單に軍隊のみを以て任ずべきではない。國民舉つて負擔すべきものである。従つて國防の目的を達する爲には軍隊も一般國民も共に平時から充分なる備へを有してゐる事が肝要である。

備へとは何か、即ち軍隊としては内容を充實し、形而上の訓練を周到にして其の精銳を圖り、一般國民としては各業を勵んで國富を増加し上下一致團結して祖國日本の文明と傳統とを擁護し、且之を發揮すると共に万一の場合に進んで國難に趨くの覺悟と能力とを備へる事である。

此の特別大演習は、畏くも大元帥陛下が御統監遊ばされて親しく三軍を訓練し給ふと共に統帥權確立の意義を明かにし給ふのである。自分は此の名譽ある大演習を見學に來て大いに得る所があつた。」

なお、15日午後4時頃から南軍司令

部が本校に移り、各教室に於て戦況の分析と戦術の修正とがなされました。司令部付きとして加陽宮殿下が校長室に御滞在され、その會議に臨席されました。

(注)石岡大火
1929(昭和4)年3月14日午後7時30分頃、中町の一角から出火、石岡町市街の1/4が焼失、焼失戸数606戸1700棟を数え、「関東大震災」を上回る災害となつた。この大火については、自らも被災者であつた今泉哲太郎、義文兄弟による詳細な記録『あ、石岡大火災』が著されている。

旧志筑村五輪堂の御野立所跡に建てられた「大元帥陛下御統監聖跡」の石碑(現石岡市権現山)



※『進修第31号』復刻

本校には生徒會機關誌『進修第31号』が1冊しかなく、それも殆どの頁が墨で塗りつぶされたり、破かれていて資料として使用することはできませんでした。しかし昨秋、土浦市立図書館で本紙(月刊Acanthus)第84号から第88号までで紹介した片岡喜作(中33回)について、昭和初期の「いはらき新聞」を閲覽していた折、司書の方が『進修』の合冊を書庫から持ってきてくれ、その中に第31号がありました。早速、旧本館活用委員の飯村弘(高5回、旧職員)がデジタルカメラで撮影し、復刻版を作製しました。

(高21回 松井泰寿)